

## 友好の植林「記念標」 チロルの山に ——除幕式参加記

『die lawine (雪崩)』—マトレ村長から頂いた村の雪崩災害記録だ。普段無縁の独和辞典を頼りに目次をたどる。写真と目次だけでも 1999 年の大災害の悲惨さが伝わってくる。

オーストリアのチロル州ガルチュア。スイスとの国境近くに位置する村である。私たち日唄協会長野は 2000 年から数回にわたり、ガルチュアをはじめとするチロル地方の山間地で雪崩防災用の植林を進めてきた。

そんな縁から今回、同村が植林地に日唄友好の記念標を設置。現地での除幕式に日唄協会長野が招かれ 7 月 8 日、訪問団長・丸井英明、会長・小林正の両氏ら会員と、研修で訪れていた県林大生らが出席した。



### ◎除幕式

『日出づる国の森』の記」と題した記念標。設置されたのは 2000 年と 2013 年の 2 回、私たちが植林したゾンベルク山の中腹。当日、私たちは小型バスに分乗して登攀し、上部では一部、作業用重機で残雪をならしている所などを通過して、13 年と同様に作業器具などを収納してある小屋前に到着した。

除幕式の会場は、ここから 13 年の植林場所を通過、さらに 2000 年の植林地近くまで下った登山

道わきの斜面。標高 2000m に近い場所だろうか。最初の植林場所に近く、眼下の谷に村を見下ろす。雪崩多発地らしく周辺には防護柵も設置されていた。

午後零時半過ぎ、所用で遅れていたマトレ村長が徒歩で到着、除幕式が始まった。村長をはじめ



め、私たちが当初活動時からお世話になってきたホイマーダー元砂防事務所長、ハーガーウィーン農科大学名誉教授は勿論、16 年に長野市を訪れて講演したチロル州前砂防局長ザウワーモーザー、同元局長ノイナー両氏、さらにホイマーダー氏後任のイムスト砂防事務所長ウェーバー氏などオーストリアの雪崩防災関係者が多数出席した。

日本側からは長野市から参加した日唄協会長野の丸井団長、小林会長のほか同行した会員 7 人と現地合流した伊藤夫妻、現地会員の青木夫妻が出席。また、恒例の海外研修で渡唄した長野県林業大学校学生や教職員関係者ら 20 数人も参加、急斜面の狭い会場はいっぱいになった。

式典ではまず、ホイマーダー氏が「1999 年の雪崩災害以降 20 年間対策を進めてきた。その中で 2000 年と 13 年に長野から来て植林した。昨年の大雪など造林には大変厳しい地域だが、雪崩防災の構造物の補完をなすもの」と、造林の役割やこれまでの防災の歴史なども語り、事業を進めてきた関係者に「ありがとう」と謝辞を述べた。

マトレ村長からは、ガルチュアは 1000 年ほど前にスイス側から人が入植して来た村。標高が

1600mほどと農業には不適で、木は伐採され、ドイツへの出稼ぎで生きてきた歴史がある。そこで1850年ごろから観光が主力となり、現在では人口780人に対しベッド数が4000、最盛期の村内人口は5000人にも達する、と村の実情を説明。

99年2月には雪崩災害により、観光客25人、村民6人の犠牲者を出した。この体験を通して防災の重要性等について述べ、「16年に長野を訪問した際、講演会場に写真が展示されていて感動。長野との交流、グローバルな流れは素晴らしい友好のしるし。皆さん、ありがとう」と、記念標設置への経緯を述べた。

これに対し日墾協会長野の丸井訪問団長から「このような歴史的な記念碑の除幕式に参列できますことは、長野から参りました日墾協会長野会員にとりまして、また個人にとりまして、大変名誉なことでありますと共に、誠に欣快に堪えないこと」と前置きし、碑文の内容、16年に長野でマトレ村長が防災について講演を行った経緯、さらに林業技術を中心にした交流などについてドイツ語であいさつした。

この後、県から託された井出英治林務部長の祝辞を日墾協会長野からマトレ村長に手渡し、出席者全員で拍手。次いでマトレ村長、ホイマーダ



一氏、丸井訪問団長らが記念標の序幕を行い、式典が終了した。

### ◎下山と歓迎昼食会

写真でも分かるように、記念標が設置された場

所は、谷底に当たるガルチュアの集落を見下ろす、かなり登った山の中腹。マトレ村長はトレッキングシューズに短パンという軽装で、登山道を軽快に登って来たが、前日も下った時感じたように、急斜面を斜めに下る、かなり疲れるルートだ。

前回植林した場所を通る時は、気になって植え



た木を見て歩いた。この時は、すでに植えてある苗が根付かなかったところに補植したもので、当然のことながら、自分がどの苗を植えたのかは定かではない。

私たちが植えた苗もすべてが根付いたわけではないだろう。標高2000mも目前で森林限界に近く、冬季の大雪など当然環境は厳しい。そんな斜面で根付いている小さな苗が、愛おしく感じられる。ホイマーダーさんに小林会長が「苗木はわが子みたいなもんだ」と話して(日本語で)いたが、まさに そのとおりであった。



前回の初秋9月と違って、今回は7月初めの夏。周辺には残雪があるものの、足元には高山植物が、今が盛りの小さな花々をつけていた。下りの登山路の足元には、名も知れないそんな草花が咲き乱れていた。本場のエーデルワイスが見られるので

は…、などと高望みを抱いたが、見ることは出来たのはインスブルックの街中。鉢植えを並べた店頭だけであった。

膝が痛そうに下ってきた小林会長が気になる。最後尾近くを歩いていて時々振り返ってみた。一時、かなり速い調子で追いついてきたため、「あ～、これなら大丈夫だな」と、下ってきた。ところがその後、いつまでたっても近づいてこない。途中、馬の放牧地の扉を閉めた後、立ち止まって山腹を振り返りながら、ゆっくりと下る。

集落に着くと、丸井団長が通路で待っていて「昼食会の会場が変更になり、レストランで行われる」とのこと。小林会長も到着しているという。「えっ！なぜ？」。マトレ村長は山岳救助隊長も務めており、膝痛の小林会長を心配し、途中の林道まで救助用の車を呼んだということらしい!? と、こんな一幕もあった。

除幕式の開始が遅れたため、午後 2 時に予定していた歓迎昼食会も大幅に遅れて開かれた。オー



ストリア側は村と防災関係者、日本側は日嶽協会長野と県林林業大学校学生ら除幕式と同様メンバーが出席。冒頭に長野県海外林業技術等導入促進協議会から託された記念品の贈呈、私たち会員が持参した土産品を送るなどにぎやかな昼食会となった。

なお、昼食会は村の庁舎に会場を移して二次会も行われ、地元のシュナップス(アルコール度の高

い蒸留酒)やワインで乾杯、出席者全員に、冒頭に記した雪崩災害を記録した本が贈られた。

(※) 村役場といっても 1 階部分にはアウトドア用品店があり、民間の建物の 2 回を借りたような庁舎であった。

《公式行事の記録は以上》

### <以下は筆者の個人的記録・感想等>

#### 【はじまりは】

歳末が押し迫った県北・小谷温泉は毎年大雪に埋もれる。一晩で 50 cm を超すまさに豪雪は、雪国の情緒とは程遠く、私にとっては恐怖といってもいいほどである。

そんな秘湯の一夜は、このところ年末の恒例になってしまった感がある。昨年のも帰国した青木さん、新潟から駆け付けた丸井先生(公式行事の記録ではないので、通常のようにこう呼ばせて頂く)を囲んで、屋外にはしんと雪が降り積もる中、例によって夜遅くまで呑み、侃侃諤諤の花が咲いた。

そんな中で、丸井先生からこんな話が出た。「来年、2019 年は日嶽国交樹立 150 年という節目の年。わが日嶽協会長野でも何か考えてもいいのではないか」。そして、長野駅前解散する時、行く先のことも考えず、握手しながら「それでは来年行きましょう」とお互いに言いながら別れた。

これが今回の訪嶽のプロローグだったのだろうか。年明けから桜の苗の植樹等「記念事業」を検討。いい案が浮かばない中、3 月に入ったころホイマーダーさんを通じて、ガルチュアで碑を設置する計画のあることが伝えられた。

事務局の「記念碑設置の経緯」文書によると、「植林に協力いただいた長野の友人に感謝し、植林した山を『日出づる国(日本)の森』と命名し、碑を設置することにした」という。

そこで、現地の事情に詳しく、ホイマーダーさ

んとも親しい丸井先生に訪問団長を依頼することとし、先生のスケジュール、毎年海外研修として訪欧している県林業大学の日程等を考慮し、7月8日に除幕式という日程を組んだ。

今回のガルチュア訪問日程は7月5日から同13日まで、機中泊の1泊も含めて8泊9日の日程でした。最初の参加者打ち合わせがあった4月7日以前から、オーストリア側と連絡がつけられる丸井先生、新村さんには日程編成から記念標の文章等、大変お世話になりました。

特に、訪問団員にとって、丸井先生には航空券から現地での電車、宿泊の手配までお世話になりました。さらに現地では通訳、ガイド役までお引き受けいただきました。また、現地では青木有希さんにガルチュアから帰国のウィーン空港まで同行頂き、丸井先生同様通訳、ガイドとお世話になりました。皆さんに心から感謝致します。有り難うございました。

#### 【訪壙日程 2019/7/5~7/13】

**第1日** 成田空港 午前11時全員集合。

13:35 定刻通り出発。1時間ほど早めにウィーン空港着。飛行機の乗継が1時間ほど遅れ、インスブルック着は午後11時ごろ。旧市街に近いホテル「Maximilian」に宿泊。長〜い1日。

**第2日** インスブルック〜イムスト間鉄道旅1時間弱。イムスト駅にホイマダー夫妻出迎え。タクシーで同市、山の手見晴らしのいいホイマダー氏宅へ。ワインとケーキの歓迎を受ける。

この日はペンション「Kreuz」にて宿泊。この名前は隣接の教会と関係があるのかな？ それとはともかく、同ペンションはホイマダーさんの義理の娘さんの経営ということ(ペンションの「名刺」にも「Sabine Heumader」と名前があった)もあったのか、夕食も朝食も食べきれないほどのもてなしであった。

**第3日** タクシーバスでガルチュアに移動。途中、カウナーグラート自然公園見学。林大生と合流。ガルチュア着。村内散策中に雨。ホテル「Luggi」に宿泊。

**第4日** ホテル前の村災害記念施設前に集合、小型バスに分乗して記念標除幕式会場のゾンベルグ山(アダムスベルク山?)へ。ホテル「Luggi」に連泊。

**第5日** イムスト駅までタクシーバスで移動。同駅までホイマダー夫妻が見送り。往路の逆コースでインスブルックまで鉄道。

アンブラス城(宮殿?)で昼食後「宮殿博物館」見学。旧市街中心部のイン橋近く、道路を挟んでイン川に面したホテル「Mondschein」に宿泊。

**第6日** 鉄道でウィーンに移動。ウィーン中央駅でまず、市内電車の48時間チケット(€14.10)を購入。宿泊所に荷物を置いた後、市電で旧市街に向かう。ドナウ運河脇のスウェーデン広場から旧市街中心部へ行き、シュテファン寺院の周辺部散策。一番の目抜き通り(ケルトナー通り)をオペラ座まで歩く。最寄りの酒場で夕食。

ウィーンの2泊はVienna Stay Apartments Tobor 1020というアパート形式の宿泊施設。暗証番号で集合住宅そのもののドアを開け、さらに暗証番号で予約した10人分一括の部屋の鍵を使って出入する。日本でいうとアパートの民泊ということか。

**第7日** まず、シェーンブルン宮殿。さすがウィーンの観光スポットらしく朝から混雑。入場には1時間半ほど待つ。その間、庭園を通過した北側の小高い丘の上にあるグロリエッテまで歩く。宮殿内に入場してからも行列で内部見学。

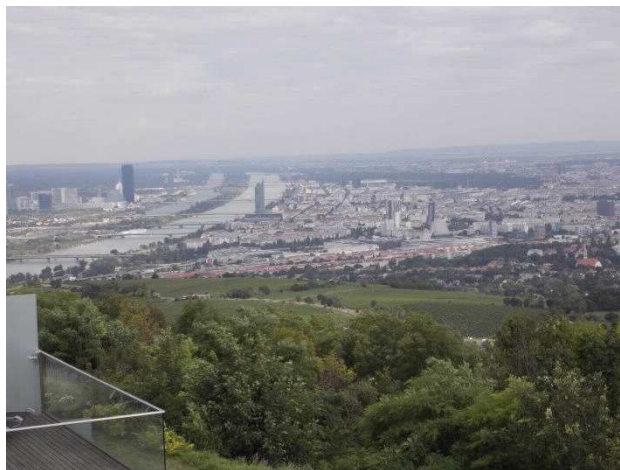
ついでウィーン軍事史博物館。2回目ながら1次大戦の引き金となったサライエボ事件の展示物が目を惹く。

さらに、この日の目玉はホイリゲ。バスでウィーンを一望できるカーレンベルクの丘に。ここから車の通らない未舗装の道を下り、斜面の

ぶどう畑の一角にあるホイリゲに着く。霧囲気を満喫できた満足のひと時。

最終日 朝一番に宿泊所を引き払う。ウィーン中央駅のコインロッカーに荷物を預け、中心部を散策。

連日私たちに付き合ってくれた青木有希さんは、ウィーンの2晩は自宅に戻ったものの、最後のウィーン空港までお世話になった。



カーレンベルクの丘からウィーン一望



記念標を囲んで



ベートーベン ルーエで



ウィーン中心部で(シュテファン大聖堂)



満足のひと時(ホイリゲで)

(了)